

昨夜からの雨が漸く止んだかと思えば、空は依然として暗雲が垂れ込める。雨に濡れた道路が放つ、あのなんとも言えない淀みと、日が差し込まない空に挟まれて息苦しさを覚えるが、斎場の中はこの比ではない程にどんよりとしていた。

二日前に雄一は叔父からの電話で父の死を知った。故郷から遠く離れた東京に住んでいた事もあつて、雄一が故郷に帰つてこられたのは訃報を聞いた日の翌日だった。顔を真っ青にして狼狽える母を、世話役を務めてくれる叔父と二人で支えながら、なんとか葬儀の日を迎えた。

町長を務めた事もある父は顔が広く、葬儀は会館ができうる最大の規模となった。遺族はその分大変なのだが、喪主を務める母は忙しなさに喘ぎながらも、どこか誇らしげに仕事をこなしていた。雄一はそんな母を冷めた目で見ていた。

そもそも、雄一と父親は仲が良くなかった。大学進学を機に上京して以来、十五年ほど故郷に帰っていない。母親からの催促を振り切つてまでも、戻らないくらいには父親を嫌っていた。それ故に、参列者がみな揃いも揃つて妙な顔つきで、父の死を悼んでいるのがどうにもしっくりこなかった。葬儀は恙無く進んでいった。告別式も無事に終わり、出棺の時間となった。親族のみならず、一般参列者も父親の見送

りに来ており、その様子を雄一はぼんやりと眺めていた。よくもまあ、こんなに来るものだと思いつながら、視線を彷徨わせていると、ふと一人の制服を着た少女に目が留まった。喪服姿の大人ばかりが居並ぶ場に、数少ない制服を着た女子学生という事もあつたのだが、それ以上に彼女の容貌に目が行った。

雄一は彼女の姿に既視感を覚えていた。鼻筋の通つた端正な顔つきも、肩まで伸びた艶やかな黒髪も、すらつとした白い手足も、女性としては少し背の高いところも、全てに見覚えがあつた。少女は雄一の視線に気がついたのか、こちらを向いた。

その瞬間、背筋が凍つた。少女がその黒目がちな瞳で自身を射貫いているのだと思うと、ぞつとした。しかし、少女から目を離す事はできなかった。雄一はこのとき、少女を見入ってしまったのだ。結局、叔父が火葬場へ行く車の準備ができたと声をかけるまで、雄一はその場を離れる事ができなかった。

火葬場に向かう車中でも、雄一は先程の少女が気になっていた。胸に期待と焦燥と、これまで感じた事の無い鈍い感情を抱えながら、少女の事を考えた。

気にかかる事はただ一つ。されど、その一つがどうしようもなく確証の得難いものだった。

彼女は存在するののか？

雄一自身、馬鹿げた事だと思っている。いくら仕事で疲れているからと言って、幻覚でも見たのかと疑うのはおかしい事だ。しかし、一度疑い出すと、少女の輪郭がぼやけだして、消えてしまいきそうだった。

堪えきれなくなった雄一は同乗している母親に先程の少女の事を訊ねた。母親は「ああ、あの子ね」と返すと、少女の事を話し出した。母親はやけに細かく話していたが、そのほとんどが雄一の耳には届いていない。どこの家の子だとか、そんなものは確証を得られた時点で全て分かる事だった。実在する、その事が事実であればそれで良かったのだ。

座席に深く腰掛けて息を吐く。

「あの子、香織ちゃんによく似ているわよね。生き写しって言うのかしら。たまに会うと、うっかり香織ちゃんって呼んじゃうの」

「……俺も、目を疑ったよ。記憶の中で眠る、香織にそっくりだった」

「あなたがこの町を出る前だから、高校二年生の頃だったかしら」

「……止めよう、この話は」

母親ははっとした表情で、口をつぐんだ。

かつての恋人にそっくりの少女。家族の次に恋人を見ていた雄一が見紛うほどの少女を、葬儀会館で見たくはなかった。

死という言葉と結びつく場所で、あの少女には出会いたくはなかったのだ。

葬儀を終え、東京に戻ってからも暫くはあの少女が頭の片隅に佇んでいた。何かにつけては少女の瞳を思い出したが、やがてはそれも無くなっていった。夏から続く大きな仕事が思考に割く脳のメモリを持って行き、一週間経たずして、少女の事は頭から抜け落ちていった。

2

雄一は多忙を極めていた。自身が主導する仕事が後一歩のところまで来ており、加えて父親の葬儀で途中抜けてしまった事に対する負い目もあり、進みをこれ以上遅らせるわけにはいかなかった。

しかし、人間には限界があった。糸が切れた人形のように眠る雄一は、昨夜その事に気づかされた。自室に戻ってすぐ強烈な睡魔に襲われ、それでもなんとか仕事をしようとデスクに向かったところで力尽きた。九月の中旬、まだ暑さが残る季節であったが、流石に真夏というわけでもない。着替えるもろくにせず眠ってしまったら身体を冷やすのは当たり前前で、ぞつとするような冷えを感じて、雄一は目を覚ました。デスクに置かれた時計を確認すると、午前四時。最後に時計

を見たときから三時間ばかり時間が過ぎていた。

デスクワーク用に誂あつらえたアロンチエアと言えど、椅子で眠るには適していなかったようで、身体は悲鳴をあげている。伸びをすると、椅子と身体が軋きしむ音がした。

身体の冷えと半覚醒の頭を目覚めさせるために、シャワーを浴びた。本来ならば浴槽に浸ひかった方が良いのだろうが、雄一にはそんな余裕などなかった。

脱衣所で身体を拭ぬっている、ふと鏡に映る自身の姿が目飛び込んできた。映し出された姿は、痛々しいほどに肋骨が浮かび上がった身体と、やつれた顔。

「死にそうな顔だな……」

ぼつりと零こぼれ出た言葉は、ここ最近周りの人間からよく言われる言葉だった。雄一は気にも留めていなかった言葉であったが、これは言い得て妙だと変なところで納得していた。

確かに、鏡に映った自身の顔は人前まへに出るのが憚はばられる程にやつれていた。頬はげっそりとこけ、目は落ち窪くぼみ、頭髮には今までなかった白髪が交まじっている。その凄せ惨げんたる有様に、雄一は自身への失望が混まじった怒りを覚えた。

まだまだ若いつもりだった。実際に三十代の半ばでまだ若いのだが、雄一はまだ学生のような活力が自身にあると思いきんでいた。それは雄一が自己分析もできないような愚か者だからというわけではなく、今まで周りをそう思わせるほど

の活力があり、無理ができた。それ故に、己の限界値は遙はるか先にあると信じて疑わなかった。しかし、無理をしたツケが今になって回まってきたのだ。

だからといって、ここで休むわけにはいかなかった。今抱える仕事は、自身のキャリアに確実に影響を与える大きな仕事だった。遅らせる、ましてや止まる事は論外であった。

着替えを済ませると、すぐにパソコンを起動させた。デスクトップが立ち上がるまでの間に栄養剤を流し込む。五時間前にも同じものを飲んでいた。一日の摂取量に限度があるらしいが、雄一は慣れてしまったようで多飲しなければ効果が出なくなっていた。

気休め程度の栄養剤が効いてくれるのを祈りながら、雄一はデスクに向かった。椅子に浅く腰掛けて、仕事用のファイルを開いた。

「重い……」

ずつしりと身体に響くような低い声だった。

パソコンも身体も重かった。さらに言うならば、仕事の進みも重く鈍にぶかった。

傍らにあったマグカップに手を伸ばし、昨日淹いれたコーヒーを口にした。冷め切っていて、味がしなかった。

目頭を押さえながら椅子に深く腰掛け直すと、思わずため息が零れた。

齒痒はがゆかった。父親が死んでいなかったらもう少し進度が速かったのではないかと思うと、あの世の父親がますます憎く思えた。死ぬときまで迷惑かけやがって、そう一人で悪態をついた。それが理不尽な物言いだと分かっている、言わずにはいられなかったのだ。

幸か不幸か、雄一には能力があった。倒れる寸前まで無理をすれば、もともと無茶な予定で、さらに進度が遅れ気味の仕事でさえもリカバリーができた。夏から散々苦しんできた仕事も漸く終わる目処めどが立った。しかし、それを素直に喜べるほどの元氣は誰も持ち合わせていなかった。

仕事に関わる部下たちも雄一ほどではなかったが、みな顔色が悪くなってきていた。部下の誰が倒れてしまうのではないかとヒヤヒヤしていたが、このまま進んでいけばそんな事態にはならないだろう。

部下たちは雄一にここまでしっかりついてきた。もともと優秀な人材ばかりであるのに、彼らは根性もあった。雄一が後一歩だからとみなを鼓舞すると、部下たちはそれに応えようとしてくれた。漸く終わる、そう誰しもが確信を持って最後の仕上げにかかった。

しかし、その希望は予想外の形で打ち砕かれた。部下の一人が忽然こつぜんとその姿を消した。彼が残していった仕事

は彼が雄一に申告していた以上に残っており、それを誰がやるかが問題になった。みな限界の中で、それを引き受けられる人はいない。なし崩し的に雄一がその仕事を引き継ぐ事となったが、傍目から見ても無理だと分かった。事実、些細なものであったが雄一は滅多にしないミスを何度か犯した。

満身創痍まんじんそういだった。ボロボロの身体に鞭打むちって、社内にも泊まり込んでも仕事をした。不安げに見つめる部下たちに、もうすぐ終わるからと、言いながら。

寿命を削りながら作業を進めていったが、不幸はまだ終わらなかった。失踪した部下が残した爆弾はそれだけでは済まなかった。

有り体に言えば、その部下は不祥事を起こしていた。彼は仕事に追われるみな目の目を盗んであれこれやっていたらしい。上司からその話を聞かされたときは、目から火花が飛んだような目眩めまいに襲われた。

後日、その上司よりさらに上の上司たちから事情を訊きかれたが、雄一は知らなかったのだから答えようがなかった。しかし、部下が完全に姿をくらまして以上、その近くにいる人間に訊かざるを得ないため、調査は進められた。

それでも、仕事を放り出してもよい理由にはならなかった。少しずつ、体調を崩す部下が増えていく中で、雄一は最後までその仕事に取り組んだ。

漸く完全に終わったのは予定よりも二週間ほどずれ込んだ、十月の半ばだった。部下は口を揃えて、雄一を賞賛した。雄一でなければこんなに早く決着は付けられなかったと。

しかし、周りはそうではなかった。

何も知らない人間たちは言葉では何も言わなかったが、雄一に向けるその視線は、侮蔑が混じるひどく冷やかかなものだった。

仕事が終わってすぐ、雄一は案の定体調を崩した。子どもの時以来の高熱を出して、身動きが取れなくなってしまっていた。

不幸中の幸いか、雄一が倒れたのは休日であったために、恋人の麻衣子まいこがすぐに駆けつけてきてくれた。彼女の甲斐甲斐しい看病もあつて、体調は快方に向かっていた。

「本当にあなたは無茶ばかり。もう少し身体を労りなさい」

「善処するよ」

「あなたの言う善処がどれほど意味のないものかって分かってる？」

顔色が良くなってきたのを確認すると、彼女は雄一に説教した。延々と、まるで母親ができの悪い息子に教え込ませるように何度も繰り返し返した。しかし、それが彼女の愛情の表れだと言う事を雄一は理解していた。

「それで、今回は何でこんなに無茶したの？」

「何でって、色々事情があるんだよ」

「だから、その事情を話せて言ってるのよ」

「別に大したことじゃない」

雄一がぶつきらぼうにそう言うと、麻衣子は大仰おおきようにため息を吐いた。

「あなたは誰かに弱音を吐くのが嫌いなようだけれど、ちゃんと辛いときは辛いと言える人間になる事をおすすめするわ。と言うより、私が気になって仕方ないの。こうやって看病してあげたんだからそれくらい教えてくれてもいいでしょ」

麻衣子の言葉からは不機嫌さが伝わってきた。彼女は不機嫌になればなるほど、言葉にはつきりと表れる。

「……楽しい話じゃないけど」

「楽しい話をしろなんて言ってるわ。あなたが今寝込んでる理由を知りたいの」

「物好きだね。他人の苦しみを背負い込もうとするなんて」

「他人じゃないわ。恋人でしょう？」

麻衣子の瞳は雄一をはつきりと射貫いていた。彼女の瞳の中には様々な感情が熾くすぶり、渦巻き、揺らめいていた。

彼女はここ数年、よくこういう目をした。彼女がその瞳を向ける度に、雄一は申し訳ない気持ちになった。

傍らに置いてあったスポーツドリンクを一口飲んで、重い

口をこじ開けた。

言葉よりも先に、深いため息が出た。しかし、麻衣子はどこか満足げな表情で雄一を見つめていた。

雄一は麻衣子に、ここ最近起きた事をゆっくりと時間をかけて話した。話が進めば進むほど、麻衣子の顔に怒りの朱が差し込んだが、途中で口を挟む事もなく、黙って聞いていた。

「全くもって理不尽だわ」

最後まで話を聞いてから、麻衣子は怒気を多分に含んだ声でそう言った。

彼女は頬をはつきりと分かるほどに紅潮させ、まるで自分の事のように感情を露わにしていた。

彼女には少々子どもっぽいところがあった。都会生まれのお嬢様である彼女は良くも悪くも真つ直ぐで、その真つ直ぐさに雄一は時々目がくらんでしまいそうになった。

「その人が悪い。あなたは悪くないわ」

「いや、俺も一応は上司だったわけだし」

「あなたが責任ある立場だったというのは分かるわよ、それでもおかしな話じゃないかしら」

「仕方がないさ。それに、仕事も終わったんだ。もう、苦労する事も暫くないだろう」

「本当かしら。あなたはどこか危なっかしいところがあるから心配だわ」

「そう?」

「なんて言うか、船頭のいない船のようで、どこか間違った方向へふらふらと行ってしまうそう」

「そんな事はないと思うけど」

「そんなことあるのよ。自分の事だから、気がついていないだけ」

麻衣子は目を細めて、雄一を見つめていた。

「あんまり、無理はしないで」

そう言った彼女の声は先程までの声色に比べて、とても弱々しく、切実だった。

彼女に何か言わなくては、そう思ったが、結局何も言えなかった。喉元まで出かかってはいたのだが、どうしてかそれが言葉になる事はなかった。

夜も更けた頃、麻衣子は帰っていった。彼女が帰っていった部屋は、もともと殺風景だったのも相まって寂しく思えた。

——どこか間違った方向へふらふらと行ってしまうそう。

雄一は麻衣子に言われた言葉を思い出していた。

雄一自身にはそんな自覚はなかった。しかし、なぜだかその言葉が頭から離れず、落ち着かなかった。

今までの道のりに、間違ったところはあっただろうか。振り返ってみても特に間違ったと思うところはなかった。

地元の高校を出て、東京の名門大学に入り、大きな会社に

就職した。高校生だった自分が思い描いた青写真の通りの道を歩んでいる。他人から見ても順調な道程だった。

失敗がなかったとは言えないが、どれもこれも些末なものや、雄一がどうにかできる話でなかったものばかりだった。

思考は堂々巡りを繰り返すばかりで、明確な答えは出てこなかった。

諦めて眠ろう。そう思った時、なぜか暫く忘れていたあの少女の瞳が思い起こされた。

熱が引き、体調が回復しても、仕事の方は元の調子を取り戻せずにいた。

精彩を欠いている。初めて上司にそんな事を言われた。事実、ミスが増えていた。致命傷になるようなものは幸いな事に起きていなかったが、いずれ起きてもおかしくない状態だった。

ミスをして、それを指摘される度に、雄一のプライドはすり減っていった。

雄一が落ち込んでいる一方で、同期が一人躍進していた。

ついこの間までは二番手、雄一の次だと言われていた男が着実に社内での存在感を強めている。喫煙所で仲の良い同僚からその話を聞かされた。

初めて、その男の事を強く意識した。

対抗心と言うよりも、もっと暗くてじめつとして、鬱屈とした黒血のような感情をその男に抱いた。それと同時に、情けないという気持ち胸の中で波紋のように広がった。

誰かに対して卑屈な感情を持つ。その事がどうしようもなくかつこ悪く思えた。

このままではいけない。なんとかしなくては、そう思っても色々なものがちぐはぐで上手く進む事ができなかった。相変わらず些細なミスが続いた。

ついに、周りから休むようにすすめられた。雄一がそれを拒むと、今度は上司から気分転換でもしてこいと言われた。

あれよあれよという間に決まった休みは、休日を含め四日となった。内心、多すぎるとは思ったが、上司からわざわざすすめられた手前、断る事はできなかった。

控えめに言っても、最悪としか言えないような気分だった。自分という存在が不要なものだと宣告されたように思えてならなかった。

自分の代わりを果たせる奴ならいると言わんばかりに、例の同僚は次々と仕事を任されていた。その様子を見て、また鬱屈とした気分になった。

それが嫌で、休暇の予定が決まってからは毎日定時で会社を出た。せっかくだから寄り道でもしようかと思っただが、趣味がろくに無い雄一はする事がなくて、結局真っ直ぐマンション

ンに帰った。

自室に戻ると、煙草たばこも吸わず、テレビも見ず、食事とシャワーだけ済ますとすぐにベッドに入った。

すぐに元に戻る。そう自分に言い聞かせながら眠った。

けれども、雄一はもう、すっかり燃え尽きてしまったのだ。

そう簡単に戻るわけがなかった。ただ無為に過ごす夜を何度も繰り返すばかりで、何かが変わるわけもなかった。

どうしようもなかった。

今日もまた、言い聞かせながら眠るのだろうか。そんな事を考えながら、ベッドに入った。

真っ白な天井を見つめ、そして瞼まぶたを閉じようとしたとき、携帯が鳴った。

鳴っていたのは社用ではなく、プライベートの携帯。表示された番号は実家のものだった。

3

母親からの電話は、父親の遺品整理がしたいから手伝えというものだった。なぜこのタイミングなのかと疑問に思ったが、父親が亡くなって慌てふためいていた母親の姿を思い出し、漸く心の整理がついたのだろうと考えると納得ができた。いつもならば、なぜあの父親のために手伝わなくてはいけ

ないのだと突っぱねていただろう。しかし、今の雄一には持て余すほどの時間があつた。そういう意味では母の頼みは時間をこれ以上に無為にする事が無くなり、むしろ都合だつた。二つ返事で了承すると、すぐに実家に戻る準備を始めた。父親の葬儀の時は気が重くて仕方がなかったが、今は苦ではなかった。もしかすると、あの少女にもう一度会えるかもしれないという期待もあつた。逸る気持ちを抑えきれず、翌日の朝には新幹線に乗り込み、乗換駅である名古屋駅に向かつていた。

雄一の故郷は鶴城市つるしろ磯泊町いそはてという、愛知県の南方にある海沿いの町である。名古屋駅から向かうには些いささか時間がかかり、二度の乗り換えを要する。さらに、乗り換えた駅から実家の最寄り駅に向かう路線はローカル線しか通っておらず、本数もかなり少ない。乗り換えが上手くいかないときは、何も無い駅のホームで三十分ほど待たされる事はざらであつた。

この日も運悪く、三十分ほどホームで待たされる事となつた。辺りを見回してみると、休日だというのに、秋風が吹き荒ぶばかりでがらんとし、誰もいない。数年前から廃線が噂うわさされていたと小耳に挟んだ事があつたが、この様子を見る限り、全くのデマではなさそうだった。

三十分というのは存外短いもので、思っていたよりも早く乗り換えの電車はやってきた。その頃には、まばらではある

が乗客もホームにいて、みな慣れたように乗り込んでいく。

距離の短いローカル線だけあって、名古屋駅から乗ってきたJRの快速とは比べものにならないくらいゆっくりとした速度で電車は走っていた。流れる景色も始発駅から離れると、時が止まっているかのような長閑なものに変わっていった。

一つ、また一つと駅を過ぎる。駅を過ぎる度に、車窓からの景色は緑が増えていく。磯泊町に入る頃には小さな藪の中を電車は走っていた。見渡す限りが緑で、車窓に触れるような距離で植物の葉やツタが茂っている。そんな緑のトンネルを抜けると、視界が一気に開け、海が広がった。故郷の海は太陽に照らされ、きらきらと輝いている。白波は寄せては返し、今にもさざ波の音が聞こえてきそうだった。

海沿いの町を離れて十数年、忘れかけていた景色の凄味に雄一は打ちのめされていた。

電車はこのまま海沿いを走り、住居が建ち並ぶ方へと入っていったところで、目的地である磯泊駅へとたどり着いた。電車から降りると、一陣の風が吹いた。駅から海は離れたところにあるはずなのに、磯の香りがした。磯の匂いは決して良い香りではないが、不思議と不快ではなかった。

木造の古めかしい駅舎を出ると、これまた古めかしい商店が出迎えてくれた。一体いつから掲げているのか分からない看板は錆だらけで、店名もろくに読めない。

その看板を雄一は懐かしく思い、見つめていた。少し前にも来たはずなのに、感じるものは何もかも異なっている。

自身の心持の違いに、思わず苦笑が漏れた。

父親の遺品整理は想像以上に大変だった。処分しようにも逐一母親の厳しいチェックを受けなくてはならなかったのだ。一見、不必要に見える物でも母親は処分の許可をなかなか出さなかった。母親曰く、後に必要になるからという事だったが、全くもって理解ができなかった。次第に腹も立ってきて、母親一人で作業した方が早いのではないかと何度も言ったが、母親は困った顔をするだけで何も答えなかった。

父親も父親で物が多かった。特に書籍は書齋に所狭しと並べられており、部屋に入ったときは思わず声を漏らしてしまった。農家を営みながら町議を務めていた父親は、農業、経済、政治、仕事に関わる様々な書籍を持っていた。いつも家を空けているような人であったのに、いつ読む暇があったのか雄一は疑問に思った。全て昔読んだ本なのかと思えば、デスクに積まれた書籍は真新しく、開いてみると二〇一三年刊行、つまり今年発売された書籍であった。後で母親から聞いた話では、次の市議選に備えていたという事だったのだが、どうにも納得ができなかった。新しい書籍は他のものに比べて専

門性が薄かった。まるで初学者のためのようなもので、何十年と政治に携わった父親が読むにはふさわしいものではないように思えた。どうにも腑に落ちなかったのだが、問い詰める相手がいない以上、どうしようもなかった。

結局、日が暮れても終わる目処が立たなかった。もとより一日では済まない事は想定済みであったが、それでも作業が遅かった。いちいち確認しなければ捨てられないのだから当然の結果ではあるが。

あまりにも非効率で二人でやる意味の無い作業に、実は何か別の意図があるのではないかと雄一は勘ぐった。こんな事のためだけに東京にいる雄一を呼び出したのなら、母親の見通しはおざなりすぎた。夕食の時にその事を母親に強い口調で問いただすと、母親は案の定何かあるようなそぶりを見せた。

しかし、母親はなかなか真意を話そうとはしなかった。いや、正確に言えば話す事ができなかった、というのが正しいだろう。母親は気の弱い人であったため、雄一の苛立つ口調に萎縮してしまっていたのだ。そんな母親の様子を見ていると、雄一も流石に冷静になった。努めて穏やかな声で訊き直すと母親は漸く重い口を開いた。

「こつちに戻ってきて欲しい」

母親の話はただどしく、要領を得ないものであったが、

つまるどころそういう事であった。

母親は誰の目から見ても分かる、一人では生きていけないタイプの人だった。箱入り娘で、人の後を追うばかりだった母親は抛り所をなくすと途端に崩れてしまう。そんな人だからこそ、父親亡き今を生きていくためには唯一の抛り所である雄一に頼らざるを得なかったのだ。

しかし、雄一はそんな母親の願いを断った。わざわざ東京から故郷に戻ってくる理由がなかったのだ。

母はひどく狼狽した。最初こそは気まずそうにして、なかなか切り出してこなかったが、内心では断られると思っていなかったのかもしれない。その後も、母親は何度も同じ事を繰り返した言ったが、雄一もまた断り続けた。終いには深く皺が刻まれた顔をくしゃくしゃにして、母親は懇願した。

雄一は情を持ち合わせぬほどの冷酷な男ではなかった。もともと母親は憎く思っていなかった事もあって、母親のこのような姿を前に、流石に良心が痛んだ。

「東京に来てくれるなら、考える」

雄一にとって最大限の譲歩だった。一人暮らしのマンションを引き払って、新しい部屋を借りなくてはならない、そう考えると億劫であったが、故郷に戻るよりはよほどマシだった。故郷に戻ってしまえば、新たな職を探さなくてはならない。もし仮に、農家を引き継いだとしても、ノウハウのない

雄一と非力な母親の二人では上手く回す事もできないだろう。そう考えると、これが考え得る最高の提案であった。

しかし、母親は頷かなかった。雄一がその理由を問い詰めると、また困ったような顔をして、「故郷だから」としか答えなかった。東京に来た方が良く、懇々と言つて聞かせるが母親はそれを聞き入れなかった。

雄一には母親がこの町に固執する意味が分からなかった。過疎化が進み、先も見えぬこの町に一体何があると言えるのだろうか。

水掛け論は終わりを見せず、結局、この話は嫌気の差した雄一が切り上げて、決着のつかぬまま保留となった。

雄一はあの押し問答の後、すぐに家を出た。行く当ても目的も何一つ無かったが、気まずさに居たたまれなくなったのだ。

気晴らしに散歩でもしようかと思つたが、街灯もろくに無いような場所で散歩するような場所はほとんど無く、仕方なしに明かりのある海岸までやつてきた。

夜の海は昼に見た時とは違う表情をしていた。太陽に照りつけられてきらきらと輝く様も良いものだったが、海面にゆつたりと月を浮かべせる夜の景色もまた良いものだった。

さざ波の音、そして潮の香りを運ぶ秋風が身体を包み込ん

だ。

砂浜に続く階段に腰を下ろし、目を閉じると境界線を失つた海と一体化した気分になった。

この町に喧噪けんそうというものは存在しない。夜は空で輝く月が主役だった。都会に慣れきってしまった雄一にとってはこの町の当たり前も、どこか非日常的なものに感じられた。

昔はよく、海に来ていた。夏が近づいてくると、海開きの日を毎日のように家族に訊いていた。あの頃は今と違って、随分快活わんぱくで腕白うでしろだった。そして、父親が嫌いではなかった。

父親を明確に嫌いだと認識したのは、中学生を卒業するくらいの頃だった。その頃の父親は町会議員を務めていたからか、単純にそういう人間だったからか分からないが、よく家を空けていた。そして、そういう時はいつも誰かと連つらんでいた。家族を放つて好き勝手にやっているくせに、雄一の進路には口うるさかった。学をつけると隣市の進学校に行く事を半ば命令のように押しつけた。高校に入ってから父親はあれこれと注文を付けた。反抗期もあつて、父親の小言がたまらなく鬱陶うづらしかった。

父親のその押しつけがましいあり方には今でも腹立たしかった。

しかし、いくら怒ろうとも父親はもういない。意味の無い事だった。

ポケットに入れていた煙草に火をつけ、白い煙を緩やかに燻らせた。久しぶりに吸った煙草はあまり美味しくはなかった。

海は存外見えていて飽きないものであったが、いかんせん季節は秋。故郷の海は心地良いものだが、季節は秋。流石に寒く、身体が底冷えするのを感じた。もう少しいたい気持ちもあつたが、体調を崩すのは拙いと、煙草を吸い終えると、ズボンについた砂を払って、その場を後にした。

海岸線から離れ、家へと向かって歩き出したが、まだ家に帰る気にはなれなかった。できればどこかで時間を潰したかったが、そんな場所は見当たらない。

かつてはこの辺りもそれなりに栄えていた。しかし、今では海沿いにある店のどれもこれもシャッターが下ろされている。昔の記憶が確かならば飲み屋がこの辺にあつたはずだが、店を開けている気配は無く街灯の白い明かりがのつぺらぼうの壁を寒々と見下ろすばかりだった。高校生の時分に衰退するのは目に見えていると馬鹿にしていた事もある町だったが、実際に弱っている様を見るのは忍びなかった。

海岸沿いの道を外れ、緩やかな坂を進む。暫く坂を上り、住宅が並ぶ方へ続く曲がり角へ差し掛かったとき、一軒の店に明かりが灯っているのを見つけた。

その店に向かって歩く。近づくほどに、薄ぼんやりとしていた店の輪郭がはっきりとしてくる。

——この店を知っている。

確信を得ると共に、夜風で冷えた身体が急速に熱を取り戻していくのを感じた。手足にぐつと力が入る。頬が熱くなり、心臓が強く拍動する。

雄一は期待していた。あの場所に望むものがあるかもしれない。

いつの間にか雄一の歩みは早くなっていた。徐々に速度は速まり、ついには逸る気持ちを抑えきれず、子どものように走り出していた。

息を切らしながら、店の前に立つ。白い外装に、木目調の扉。掲げられた看板は年季が入っているものの、その名をはっきりと誇示している。

『喫茶ブランエール』

この海岸沿いで唯一の喫茶店であり、雄一の青春を象徴する場所であつた。そんな思い出のブランエールから零れ出る、淡く暖かな光に雄一は吸い寄せられた。

ほんの少し錆びたドアハンドルを引き、扉を開けると、からんころんと古めかしいベルの音が鳴った。

店内に入ると、雄一は思わず息を飲んだ。

——あの時とまるで何も変わっていない。

そう、何も変わっていないのだ。

海馬に鮮烈に焼き付いた記憶のまま、ブランエールは時が

止まったように在り続けていた。

外装と同じく、白を基調とした内装に、振り子時計をはじめとする古めかしい調度品。カウンターの奥にあるコーヒータンクや香料が入った瓶を並べた棚。見慣れたものが何一つ変わらぬまま在り続ける様に雄一は心地良い衝撃を受けた。

しかし、それ以上に衝撃を受けたものがあつた。テーブルに向かうブレザーを着た少女の姿。彼女は、紛れもなく父親の葬儀の時に見た少女だった。

ブランドエールは、かつての恋人の父親が営む店である。雄一にとってここが思い出の場所であるのも、この店には恋人が手伝いでよくいたからだ。それ故に、恋人によく似た少女がいるのではないかと期待してしまつたのだが、まさしくその通りであつて、あまりにも期待通りに進んでしまつた事に、雄一は思わず呆然ぼうぜんとした。

「雄一さん……？」

羽根のように柔らかく、水晶のように澄んだ少女の音が響いた。少女の声は初めて聞いたのに、懐かしさを感じるものだった。

しかし、一つだけ違和感を覚えた。どうして彼女が、自分の名前を知っているのだろうか。雄一が怪訝けげんそうな表情で彼女を見つめると、少女は微笑んだ。

「君は僕の事を知っているのか？」

「ええ。お母さんやおじいちゃんから何度かお話を聞かせてもらいましたから。あ、ごめんなさい。急にお名前を呼んでびっくりされましたよね」

「ああ、いいんだ。僕も君の事は母から聞いて知っていたからね。湊斗綾香さん、詩織さんの娘さんだよね？」

彼女——綾香は頷いた。

彼女の名前を母親から初めて聞いたとき、雄一はそこはかとない縁というものを感じた。雄一と綾香とはなく、恋人と綾香の縁である。

恋人の名前は香織だった。「香」という文字が入っているだけだったが、香織と綾香、瓜二つの容貌ようぼうに縁を漠然とでもあつたが感じた。

「ところで、何かご用でしょうか？」

「ああ、えつと……明かりが点ついていたものだから、少し寄つてみようと思つて」

「そうでしたか。でも、申し訳ありません。もう、お店は閉まつているのです」

時計を確認すると、夜の八時を少し過ぎていた。田舎の喫茶店ならば閉まつていてもおかしくない時間だった。

「ああ、それはすまない事をした。ではまた、日を改めて——」

「いえ、そうではないのです」

雄一の言葉を少女が遮る。そして、彼女はどこか寂しそ

に首を小さく横に振った。

「もう、お店を開けていないのです」

「……そうだったか。それは残念だ」

よく考えれば分かる事だった。この店にいたのは綾香だけで、店主がいなかったのだ。

仕方なく店を出ようとしたが、それを綾香は制止した。

「あの、よかったら、コーヒーの一杯でもどうですか？ おじいちゃんほど上手には淹れられませんが」

「いいのかい？ 迷惑じゃないだろうか」

「私も飲むので問題ないです。どうぞ、カウンターにお掛けください」

綾香はそう言うのと、カウンターの奥に向かった。雄一も彼女にすすめられるまま、カウンター前の椅子に腰掛けた。綾香は慣れた手つきで銀のポットを火にかけ、棚からコーヒー豆の瓶を選んだ。

「慣れているね」

「昔、よくお手伝いしてたんですよ。おじいちゃん、こだわりが強くて。気がつけば慣れていましたね」

彼女は楽しげに微笑んだ。雄一は最初のやりとりで綾香からどこか大人びた印象を受けたが、今の楽しそうに笑う彼女からは少女らしさを感じられた。

今度は棚に置かれたサイフォン式ドリッパーとアルコール

ランプを取り出し、カウンターのの上に置いた。化学の実験でも始まりそうなドリッパーに沸かしたポットの湯を注ぐと、フラスコの下からアルコールランプに火を付けて、沸騰させていく。

彼女の手つきは惚れ惚れするほど鮮やかだった。一度も手間取る事もなく、淡々と全てをこなしていった。

ジノリの白いカップにコーヒーを注ぐと、湯気と共にコーヒーの香ばしい匂いが広がった。

「どうぞ」

「いただきます」

カップに手をかけ、一口飲む。たった一口なのに、口中に豊かな風味が広がっていくのが分かった。彼女は謙遜していたが、正直なところ、こんなに美味しいコーヒーを飲んだのは久しぶりの事だった。たまに自分で淹れる味気ないコーヒーとは大違いだと、雄一は思った。

美味しい、そう漏れ出た言葉を聞き漏らさなかったようで、綾香は雄一の顔を見つめながらはにかんだ。雄一はなんだか照れくさくなって、視線を彼女から逸らした。

綾香はカウンターの向こうに腰掛けると、彼女もまた、自身の淹れたコーヒーを一口飲んだ。目を細めて、その味わいを静かに楽しんでいるようだった。

少しの間だけ、まどろみのような時間が流れた。小気味の

良いジャズなんかは流れておらず、時計の音だけが聞こえる静寂の世界であったが、それがたまらなく心地良かった。

コーヒーを飲んでいるのに思わずあくびが出そうになった。それをかみ殺すと、綾香も同じようにあくびをかみ殺していた。雄一の視線に気がついたのか、綾香は頬をほんのりと朱くして照れてしまった。

「あ、あの。雄一さんは東京にお住まいなんですよ。今日はどうかなさったんですか？」

照れ隠しなのだろう、綾香は早口に訊ねた。

「ああ、父親の遺品整理にね」

雄一にとっては何の気なしの言葉だったが、綾香には何かピンときたようで、照れた表情から神妙な顔つきに変わった。

「この度はご愁傷様でした」

「ああ、そういえば君は父の葬儀に来てくれていたね」

「ええ、茂さんには色々とよくしていただきましたから」

綾香は心底悲しげにそう言った。彼女から父親の話を出くと、なんだか腹の奥底がうずくような心地がした。表情に出してしまったのか、彼女は不思議そうに雄一の顔を見つめた。

綾香の視線に慌てた雄一は話題をすり変えた。

「そういえば、どうして君はこんな所に？ もう、お店は開けていないんだよね」

「ここってすごく落ち着きますよね。だから、こうして勉強

をしに……」

そう言って、綾香はノートを見せた。綺麗な字でびっしり書き込まれたノートは彼女の人柄をよく表していた。

「でも、そのためにわざわざ電気を？」

「実は、おじいちゃんまたここでお店を開く気みたいなんです。腰が治ったらまたやるんだって、聞かないんですよ」

「そうか、早く良くなるといいね」

「ええ、そうですね」

綾香は穏やかに微笑んだ。彼女もそうなる事を本心から望んでいるのだろう。

その後も会話は続いた。お互いの事をほとんど知らないはずなのに、古くからの級友と思い出話に花を咲かせているかのように止めどなく話をした。誰かとこんなにも他愛のない話したのは久しぶりだった。趣味の話だとか、彼女が着ている制服が雄一の母校のものであるとか、そういった世間話を繰り返した。

一度、お互いのカップの中が空になり、おかわりが注がれたが、それもまた無くなる頃には、結構な時間が経っていた。

そろそろ帰らなくてはと、雄一が財布に手かけたところ、それを綾香に制止された。

「お代は結構ですよ。他人様からお金を頂けるようなものではないですから」

「いや、しかし……」

「いいんです」

彼女は聞き入れる気はないようで、さつさと片付けを始めました。お札をどこかに忍ばせようかとも考えたが、彼女の厚意を無下にする必要もないと思い、ありがたくごちそうになっておく事にした。

雄一は綾香の片付けが終わるのを待って、一緒に店を出た。その際にお札を言うと、彼女は「私も楽しかったですから」と返した。

「いつもここで勉強しますから、よかったです、いつでも来てください。お母さんやおじいちゃんも会いたがると思います」

「いいのかな？」

「ええ、明日来てくださっても構いませんよ。もしかしたら、二人も来るかもしれませんし」

「そうか、光治みつはさんたちが……」

「ええ、きつと来ます。それじゃあ、そろそろ帰りますね」「もう暗いし、途中まで送っていくよ。通りなんだ」

そう言うと、雄一は綾香の隣を歩いた。綾香は一瞬戸惑ったような表情を見せたが、すぐに笑って「エスコートされてるみたいで照れちゃいますね」と軽口を言った。

また他愛たあいのない会話をしながら夜道を歩き、曲がり道で綾

香を見送ると、雄一はどこか晴れやかな気持ちで家へと歩いて行った。

翌日の午後、雄一は町を自転車で巡っていた。遺品整理がただの口実であったために、やる事が無くなってしまったのだ。帰ってもよかつたのだが、もう一度ブランエンルルに行きたくて、町に残る事にした。だからといって家にいると母親がまたあの話を蒸し返すので、出かけるしかなかったのだ。日頃運動もしていなかつたし、いい機会だと仕舞い込んであった自転車をわざわざ引つ張り出して走り出した。

狭い町であるから、めぼしいところを全て巡ってもそんなに時間はかからなかつた。そもそも雄一が上京してから何か大きな変化があつたかと言われると、特になかつたのだ。観光地とされる場所に行つても、雄一の興味をそそるような物はなかつた。ただ漫然と自然の中を自転車で走つた。

日が暮れかけた頃、最後に雄一がやって来たのは、町で唯一ホテルが建ち並ぶ場所だった。海に面してホテルや旅館がいくつも建ち並んでいるが、人通りはまばらだった。紅葉の季節にわざわざ海なんかに来る人が少ないのは分かるが、昔の今時分はもう少し客がいたような気がした。

そのまま自転車を走らせ、海水浴場の方に向かうと、不自然に立つモニュメントに目が留まつた。自転車から降りて、

モニュメントの前に立つと、雄一はこのモニュメントの正体を思い出した。

三本の白い曲線が絡み合ったデザインのこのモニュメントは礧泊町をはじめとする三つの町を表している。これらの町は礧泊郡に属し、お互いに協力関係にあった。その協働をモチーフにしているのだが、今はもう隣接していた鶴城市に吸収合併されてしまったため、その意味は失われてしまっている。

合併に踏み切ったのは、当時町長を務めていた父親だった。礧泊のためと言い続けていたが、結局礧泊を終わらせたのが父親だったというのはひどく滑稽だった。

モニュメントの隣には「ようこそ、海の町へ」と書かれた立て看板が添えられている。本来は「礧泊」と書かれていたところを塗り直したのか、不自然に「海の」という部分だけ浮き出ている。その様を、雄一は悲しげに見つめた。

このモニュメントは礧泊町の負の遺産であった。一九八九年に行われた政策によって、各自治体に一億円が交付された。それを礧泊町は温泉事業の投資に用いた。当時はい道に困り、無駄遣いするような自治体がある中で、温泉、つまりは新たな産業としての観光地整備の投資は建設的な判断だった。

しかし、そこには大きな問題があった。礧泊温泉はすでに

枯渇し始めていて、温泉と呼べるものではなくなり始めていたのだ。対処をすればよかったものにも関わらず、観光協会はそれをひた隠しにし、温泉を観光資源として押し出した。その事がやがて明るみに出たとき、観光協会と自治体は大きく非難された。伸び始めていた礧泊温泉というブランドは失速し、一次産業の町から観光の町への転身というプランを後退させた。

この事件が起こったのは、雄一が高校生の頃だった。当時の雄一はこの行政、観光協会のあり方、ひいては礧泊町そのものを痛烈に批判した。

バブルが弾けても、まだ華やかな時代を忘れない人が多い時代を生きていた雄一にとって、日夜テレビで流れる都会の姿は刺激的なもので、次々と開発されるリゾート地は憧れのものであった。都会にはなれなくてもリゾート地になれるかもしれないと雄一は密かに期待していたのだ。結局、リゾート開発は失敗し、客足も停滞する町。そんな時分にモニュメントは造られた。

当時の雄一は町を象徴するこのモニュメントを苦々しく見詰め、罵った。

しかし、今となってはそんな感情を昔は持っていたというのが信じられないほど、冷静に見る事ができた。

今の雄一はあのとき、観光協会がした選択の意味と、そう

せざるを得なかった理由を賛同できなくても理解はできた。けれども、当時の自分はその事を考えずに愚かだと一笑に付した。出所の分からない義憤に駆られ、ああすべきだった、こうすべきだったと、もしもの話を仲の良い友人と重ねた。父親に意見を言っただけで批判され、その度に喧嘩をした。諫める母を突っぱねて、片田舎に未来はないと町議である父親を蔑んだ。

高校生の雄一は、都会というものはきらきらと輝いて、素晴らしいものだと思っていて疑わなかった。都会へ行けば何かが変わる、そう盲目に信じ込んで、受験勉強にのめり込んだ。

当時の自分を回顧して、雄一は思わず苦笑を漏らした。腹立たしいが、あのとときの自分の言っている事は父親に蹴されても仕方がないほどにめっちゃくちゃだった。

——そういえば、香織とこの話で揉めたっけ。

思い返すと、雄一と香織との間で大きく意見を違えたのは、この話だけだった。雄一は香織にもこの町を馬鹿にしたような話をしていただけだが、香織はずっとこの町は良い町だと言いつづけていた。勿論雄一はそれに反論したが、香織もまた言い返した。水掛け論が続く、視野が狭いと、互いに言い合った。互いに自分が正しいと信じていた。しかし、最後には香織が雄一の考えに理解を示した。そして、生まれ故郷の変容の是非を客観的に考える必要があると言いい、いつの間にか香

織も東京の大学を目指し始めた。

今考えると、香織は喧嘩しなくて折れたんじゃないかと思つた。色々口実を付けて、ただ一緒に勉強がしたかっただけなのではないだろうか。

雄一は気恥ずかしくなって首を振って思考を止めた。どうせ自惚れだろう。だが、仮にそうだとすると、香織は最後までこの町は良いものだと思っていた事になる。

しかしながら、それが分かったところでどうしようもない。どちらが正しいとかは決められるものではないだろう。

なんとも言えない気分になって、雄一はごまかすように煙草の火を付けた。そして、燻る煙を見ながら、当時はどうしようもないくらい若かったんだなど、過去の自分を自嘲した。

夜になると、雄一はブランエールに足を運んだ。店内では昨日と同じように綾香がテーブルに向かって勉強をしていた。

綾香は雄一に気がつくと、カウンター前に座るように促した。

「昨日、家族に雄一さんの話をしたらみんな会いたがってましたよ。でも、残念な事に今日は都合が合わなくて、来られないみたいですよ」

綾香は会話しながらも淀みない手つきでドリッパーを用意し、コーヒーを淹れ始めていた。

「忙しいのかい？」

「いえ、今日はたまたま町内会の集まりがあったらしくて」

「ああ、そういえばそろそろ秋祭りの時期だな」

「ええ。最近は仕事以外の事が忙しそうで」

「誠さんは？」

「え？ ああ……お父さんは今何してるんでしょね。お母さんと別れて出て行ってからは連絡取ってないですから」

心臓がどきんと跳ねた。思いがけぬ言葉に驚きを覚えるのと同時に、しまったという思いが破裂した。

「申し訳ない」

「いえ、お気になさらずに。離婚したのは私が幼稚園に上がる前の事ですし、今更どうも思いませんよ」

綾香は気にも留めていないと言わんばかりに、澄ました顔で二人分のカップにコーヒーを注いだ。

「昨日、おじいちゃんから少しだけアドバイスをもたらってきتانです。ランプの火を当てる場所の調節の仕方とか、色々。さあ、どうぞ」

気まずさから手を伸ばすのを躊躇ちゅうちゆしてしまったが、期待に満ちた綾香の視線を一身に受け、たまらず一口飲んだ。昨日と変わらず、感服するような美味しさだった。しかし、雄一には昨日のものとの違いを言語化するような繊細な味覚を持ち合わせていない。自信ありげの綾香に対してなんだか申し訳なく感じた。

カウンターの向こうに腰掛けた綾香も一口啜り、静かに頷いた。

このマスターである光治さんはこだわりの強い人だった。彼の孫に当たる綾香は手伝いもしていたと言うからには当然違いが分かるのだろうと、雄一は思った。しかし、

「いや、さっぱり違いが分かりませんね。いつもと同じです」
そう言って、綾香はあっけらかんと笑った。不用意に昨日よりも美味しいなどと言わなくてよかったと、雄一は内心安堵した。

今日のブランエールは昨日以上に、時の流れがゆつたりとしていた。昨夜と同じように綾香と会話をしている、思った以上に時間は進まない。昨日で当たり障りのない会話は言い尽くしてしまったし、雄一は先程みたいな事はごめんだと遠慮して踏み行つた話がなされないが故であろう。

雄一は沈黙が嫌いな質ではないが、流石に年頃の女の子と無言でいるのは堪こたえた。何か会話の糸口となるようなものはないかと、店内を窺うかがった。

すると、彼女が先程まで使っていたテキストが雄一の目に留まった。よれかけているページから使い込まれているのが分かる。

「そういえば、君は受験生なのかい？」
「いいえ、まだ高校二年生です」

「へえ、すっかり勉強しているんだね。良い事だとは思いますが、疲れないかい？」

「目標がありますから」

「目標？」

「はい。東京の大学に行きたいんです。できれば、いいところに」

東京、その響きに雄一は引っかけりを覚えた。

引っかけりを覚えた理由は明白であった。雄一が今日、モニュメントの前で若い頃の自分を回顧していたからだ。加えて言うのなら、その自分を否定的に。

「どうして、東京の大学に行きたいんだい？」

雄一はたまたまらず、綾香に訊ねると、綾香は困った表情を浮かべた。暫し思案した後、はにかみながら綾香は答えた。

「何と言いますか、知らない世界を見てみたいんです。かつこよく言うと言見識を深めたいと言うんですかね」

「見識……」

「もちろん、単純に憧れとかもあるんですよ。原宿とか渋谷ってすごいじゃないですか」

「確かに、若い人から見たらすごい場所なのかもしれないね。」

「そうか、それじゃあ、向こうで就職も考えてる？」

「うーん、そうでもないですね。もしかしたら戻ってくるかもしれないですね」

「戻ってくるかも、か」

雄一にとっては驚くべき回答だった。高校生が東京に行つて、この町にまた戻ってくるかもしれないと考えている事がたまたまなく信じられなかった。流石さすがに高校生の時ほどこの町を馬鹿にしてはいないが、若者が暮らすには退屈すぎるはずだった。

「割とこの町が気に入ってるんです。のんびりとしてて、自然も多いです。子育てとかしやすそうですよ。待機児童とか、授業で習いました。それに、就職先も市内の方に行けばあるでしょうし、公務員も良いかもしれません」

「若いのに珍しいね」

「そうですか？ いや、そうかもしれないですね。でも、将来の事って大事じゃないですか。いずれ結婚するかもしれないし、そうなるはずと若者気分です浮かれてるわけにもいきませんし」

「考えているんだね、とても、良い事だと思うよ」

雄一がそう言うと、綾香は少し照れた表情をした。そして、今まで雄一をじつと見つめていた視線をそつと外した。

「雄一さんはどうだったんですか？ この町を離れてたんですよね」

「僕も、若い頃は開放的な東京に憧れて、東京の大学に行つたよ。時代も時代だったしね」

「時代？」

「バブルって聞いた事あるよね。僕が受験生だった頃はそれが弾けたばかりの頃だったからね。田舎者の僕はまだまだ都会への憧れを捨てきれいなかったんだ」

「東京に行つて、世界は広がりましたか？」

「まあね。でも——」

良くも悪くもだけど、と出かかったのを雄一は飲み込んだ。

綾香と雄一とは様々な部分で異なっている。その事にはほんの少し話しただけでも分かった。綾香に自分の経験則が当てはまるわけではない。だから、満足げに頷く綾香に水を差すような事を言うのは止めようと思ったのだ。

雄一は優しく微笑みかけて、「変わったよ」と言い直した。

「ますます東京に憧れちゃいますね。でも……」

綾香は不意に言い淀んだ。穏やかな笑顔が波が引くようにすつと消え、苦しい表情に変わっていた。

「実は、東京の大学に行きたいって言うと、両親からはあんまり良い顔をされません」

綾香は悲しげに、そしてどこか諦念ていねんのこもった声で呟いた。

雄一は綾香がそういった状況にあるだろう事は、うすうす感じていた。そして、その理由もなんとなくではあったが理解していた。

彼女の母親である詩織は、香織の死をその目で見ていた。

車で撥ねられる香織をその場で見てしまったのだ。

そんな詩織が綾香を手放したくないと考えるのは、事情を知る雄一にとっては想像に難くなかった。

綾香もなんとなく、気づいているのではないだろうか。だからこそ、彼女の言葉には反抗心の色が見えなかった。

「とにかく、今は勉強なんです。勉強しておくのは悪い事じゃないですから」

綾香は力強く言うと、傍らのテキストに手を伸ばした。

雄一はコーヒーを飲みながら、綾香の様子を眺めていた。

彼女は問題を次々と解いていったが、あるところでその手が止まった。

「あの、雄一さん。これ解けますか？」

手渡されたテキストを見た。どうやら綾香は数学の問題に躓つまずいたらしい。久しぶりに見る高校数学に雄一は頭を悩ませながらも、なんとか解答を出す。その後、綾香が答え合わせをすると、驚いた顔で雄一を褒め称えた。

「すごいですね、雄一さん。お母さんじゃあ解けないですもん」

「学生の時分に家庭教師をされていてね。まあ、このくらいなら今でもできるよ」

「あ、じゃあこの問題なんですけど」

そう言って、綾香は雄一にまた違う問題を訊ねた。その度

に、雄一は頭を悩ましながらも、確実に答えていった。

そんなやりとりを何度かすると、気づけば夜も更けていた。綾香が帰り支度を始めたので、雄一も帰る準備を始めた。

お代を出そうとすると、綾香はまたも断った。流石に二日もたでコーヒーを出してもらうのは忍びなく、雄一は粘ったが、綾香は勉強を見てくれたお礼です、と言って突っぱねた。

店を出ると、辺りは藍色の緞帳どんちやうが下りていた。雲がかかった月は窮屈そうに、二人を窺っている。

思っていた以上に時間が経っていたらしい。振り子時計が一時間毎に刻む音を何度か聞いたが、ここまでだとは雄一も、綾香も思っていなかった。

「今日は家まで送っていくよ。流石に、夜も遅い」

「そんな、悪いですよ。私の勉強のせいで遅くなったのに」
「僕が君を引き留めたんだ。僕がコーヒーをのんびり飲んでいたせいでね」

「でも……いえ、よろしくお願いします」

綾香は申し出を受けると、雄一の隣に回り、そしてゆっくりと歩き出した。

隣を歩く綾香が、時折こちらを見上げるのを見て、雄一の中で不思議な感覚が渦巻いた。

それは懐かしさに浸るような想いと、自分は今何をやってい

るのだろうかという想い。それらがまぜこぜになったものが弾け、雄一自身にもどう判断したらよいか分からない感覚となつて胸の中に沈殿していた。

別れ際、綾香はどこか弱々しい声で雄一に訊ねた。

「私って、そんなに叔母に似ていますか？」

不意の質問に思わず面食らった。しかし、努めて冷静に言葉を返す。

「容姿はとても似ているよ。初めて見たときはびっくりしたからね」

「容姿は、ですか」

「そう、容姿はね」

綾香は、そうですか、と呟くと家に入ってしまった。しかし、すぐに外に出てきて、おやすみなさいと言ってまた戻っていった。

彼女が何を聞きたかったのかはなんとなく察しがついていた。

十七歳で途絶えた香織との思い出。

十七歳から進もうとする綾香の今。

その二つはどうしても重なって見えた。

雄一がそうであるように周りも彼女に綾香の面影を重ねているのだろう。思春期の彼女にとって、それがいかに残酷な事か、周りはきつと気づいていない。気づいたとしても、抑

えられないのだろう。綾香の中に潜む面影が蠱惑的に微笑みかけるのだから。

その事で苦しむ彼女に、香織と重ねていますとは言えなかった。聡明な彼女ならば本心を見抜いているかも知らないが、馬鹿正直に何から何まで香織にそっくりだと言うよりはマシだろう。

綾香の事を考えると、胸が締め付けられる思いがした。

秋風の冷たさが頬に触れる。彼女の孤独はこれ以上に冷たいものなのだろうか。

4

結局、母親とは定期的に帰ってくる事で一旦話がついた。今まで一切帰ってこなかったのだから、それくらいはせめてして欲しいと言う事だった。

ため息を吐きたくなるような余計な厄介事が増えてしまった。これからは帰省の予定を組まなくてはいけないと考えるのと億劫な気分になった。

できる事なら、煩わしい厄介事は少ない方がよかった。今は色々な事が気になって煩わしい。不必要な厄介事を背負い込む気力なんてなかった。

東京に戻って一週間が経っていた。恐ろしいほど、何も変

わっていないなかった。相変わらず、雄一は二番手のままで鬱屈とした空気の中、仕事をこなしていた。

ミスは無くなっていた。しかし、かつてほどの功績をあげる事もなかった。

有り体に言えば停滞していた。今までは進みっぱなしだったその歩みはびたりと止まってしまっていた。

自分の意思とは無関係にデッドウェイトがぶら下がって、走る速度が遅くなって、いつの間にか動かなくなっていた。

そんな状況になって初めて気がついた。自身は競争の中にあるのだと。振り返る事がなかったせいで、その後ろをびたりとくっついていた存在に気がつかなかった。

三番手がすぐ後ろに差し迫っていた。きっと、いつか追い越されてしまうだろう。

追う事に慣れていない、だから誰かを追い越す術を知らない。足踏みをしながら追い抜かれるのを待っている。

この先、ずっと停滞したままなんじゃないかと考えて、ぞつとした。

「考えすぎよ。三十代によくあるそういう時期と、失敗がたまたま重なっちゃっただけ」

見かねた麻衣子が雄一にそう言った。

「たった一度の、それも些末な失敗で」
麻衣子はそう付け加えて言った。

確かにその通りだった。簡単に理解のできる言葉だった。ならば、なぜ？

「そんなの、単純にその仕事が好きではないんじゃないの？」

麻衣子はさも当たり前のようにそんな事を言った。

「嫌いじゃないは別に好きだって事にはならないわよ」

反論しようとした雄一を牽制するような言葉だった。

「一度、考えるのをやめたら？」

麻衣子はきつぱりとそう言った。

しかし、雄一にとってはそう易々とできる事ではなかった。

思考の停止はさらに停滞してしまうのではないかと不安になったのだ。

無い方がよい、でも、無いと怖い。雄一はそんな自己矛盾を抱えていた。

どうにも上手く進まない。

見えない霧の中を歩いている、そんな気分だった。

思春期の頃も、同じくらい、色々な事で悩んでいた。

悩んでいたのは思い出せる。でも、どう乗り切ったのかが思い出せない。最後に記憶があるのは、何も考えず、勉強に打ち込んで気を紛らわせていた事。

それでは、今と何も変わらない。

「何か目標でも立てたらいいんじゃない？」

そんなものでどうにかなるとは思えなかった。

なんとかしなきゃ、焦りだけが加速した。

無様にもがいた。でも、すぐに溺れて沈んでいった。

そんな事を繰り返しているうちに、気がつけば冬になっていた。

頬を抉る風は、秋よりも強く、鋭く、そして、痛かった。

5

「雄一さんは将来の夢ってありましたか？」

十二月、母親の剣幕に負けて帰ってきたある日の事、駅前で会った綾香にそんな事を訊ねられた。

せっかくだからとブランエールに向かい、そこでまた改めて夢について訊ねられた。

雄一はその問いの答えに窮し、覚えていないと返した。

「進路志望書を書かなきゃいけないんですけど、一概に進学って書いても理由まで付けないといけないんですよ」

テーブルの上に置かれたプリントには、「大学進学」と書かれている他には何も書かれていない。

「どうしてその学部なのか、とか。無ければ無いでいいらしいんですけど、なんかそれもどうかなって思ってた」

「前に話してくれたのでは駄目なのかい？」

「それでもいいんですけど、せっかくですしもう一度考えて

みよかなって思ってたんです」

「律儀なんだね」

「それは、どうでしょう。多分、律儀とは違うんじゃないでしょうか。なんて言うか、そういう性分なんです」

そう言うと、綾香は雄一に向けていた視線をプリントに戻した。

真剣な顔でプリントと向き合う綾香を雄一はぼんやりと見つめていた。夢について悩む少女がなんとなく羨ましかった。

綾香と雄一はおそらく、同じ系統の事を悩んでいる。しかし、向かうベクトルが異なっていた。

自身の将来を真摯に考え、純粹な夢を見る少女と、自身を納得させるための後付けのような夢を求める自分。

得も言われぬ感情に胸を突かれた。

「そういうえば、叔母の夢って何だったんですか？」

「香織の？」

「ええ、よく似ていると言われるので何かの指針になるかなって」

綾香は悪戯っぽく笑いながらそう言った。

真意を測りかねる質問で、思わずたじろいだ。

しかし、それを表情に出してはいけないと、努めて平静に答えた。

「香織はよくこの店を継ぎたいとか言ってたな」

「ブランエールをですか？」

「そう。ああ、でも今のままだと客の入りが減っていく一方だから、まずはそれをなんとかしたいとも言ってたよ。まあ、要するにこの店を残したいって事なんだろう」

「そうだったんですか……なんだか、意外でした」

「意外？」

「ええ、もつと都会志向の強い人だと思っていたので」

「いや、香織はどちらかという地元志向だったよ。恥ずかしい話だけど、僕がこの町を貶すような事を言うと、香織は怒ったんだよ。この町はいい所だって」

「雄一さんは、この町が好きじゃないんですか？」

「どうだろうね。その頃は思春期というか、多感な時期で父親が町議だからね、反発したかったんだと思う」

「じゃあ、嫌いではないと」

「まあ、そうかもしれない。なんだかんだで、こうして帰ってきているくらいだからね」

「この町は良い所ですよ。前に言ったかもしれないが」

「君がそういうのなら、そうかもしれないね」

抵抗心が薄らいでいる、それは雄一も自覚している事だった。父親の葬式で帰ってきたときよりも、随分心のハードルが下がっている気がした。その理由は言わずもがな綾香とブランエールにあった。

縛ほだされている、そう言ってしまえばおしまいだが、ブランエールにいたる間は、余計な事で悩まずに済むのだ。たとえば、何か思う事があってもすぐに霧散する。

永久のようにゆったりとした時間がブランエールにはあった。

「しかし、このお店残せるんでしょうか」

綾香は弱々しい声で、そんな事を言った。

「私がお手伝いしていた頃も、お客さんは地元のご高齢の方ばかりで、はつきり言って顔見知りの人しか来てませんでした。なので、仮にお店を開けても残せるのか不安なんです」

綾香の不安はもつともな事だった。

綾香が物心つく頃は、もうこの町は寂れていただろう。お店もシャッターを下ろしたままの所が多く、活気というものは日々の生活からでは見る事ができなかつただろう。

だから、ブランエールも同じ道を辿ると危惧しているのだ。

「多分、このままでは無理ですよ」

雄一は何も言えなかった。

「実は、なんとかなるかもって期待していたときがあるんです」

「何かあったの？」

「雄一さんは、茂さんが市議の中で誰よりも観光に力を入れていたのをご存じですか？」

「いや、初耳だ」

「町長を終えられて市議になると、観光に力を入れるべきだと言つて、主導となって町おこしを始めました。少しずつ、市全体としても人が増え、やがては磯泊も、というところで茂さんは亡くなつてしまいました」

綾香が悲しげにつぶや呟くのを、雄一は押し黙って聞いている

「あの人がそんな事を……」

「茂さんがいない今、その計画はどうなるんでしょうね」

「普通、誰かが引き継ぐんじゃないか？」

「そうだと思いますが、旧磯泊町の市議は茂さんしかいませんでしたから、市街地を優先的に進める方向に切り替えられるかもしれません」

綾香はため息を漏らした。

「まあ、私に気にしても仕方が無い事なんですけどね」

「いや、そんな事はないよ。大切な事だ。君くらいの歳の子が、町に関心を寄せるというのは立派な事だ」

「そうでしょうか？」

「もちろん」

雄一が力強くそう言うと、綾香は少し照れくさそうにはにかんだ。

我ながららしくないと思つた。こんな理由で人を褒めるのは今までの自分であつたら、ありえない事だった。

しかし、彼女の胸中にあるものはどうしてか、とても美しく思えた。真摯に町を見つめ、純粹に未来を考える。

やはり、彼女は香織によく似ていた。口が裂けても綾香には言えないが。

「雄一さんはお話ししやすいです。普段は言わないような事も気がついたら話しちゃっています」

「そう？ そんな事言われた事ないな」

「そうなんですか？ 私はとつてもお話ししやすいです。さっきみたいな弱音も不安も言えるくらいには」

「君はあまり弱音を言わないタイプなのか？」

「ええ、そうですね。なんだか恥ずかしくって」

「それはよくないな。我慢するよりも、辛いときは辛いと言える人間の方が良い」

麻衣子の受け売りだった。自分自身を棚に上げてよく言えたもんだと内心毒突く。

「そういうものなんですか？」

「ああ、実体験だからな。間違いない」

「じゃあ、これからも相談に乗ってもらえますか？」

「いいとも。なんでも言ってくれ。できる限り、君の力になるろう」

雄一がそう言うのと、綾香は花がつぼみから割れ咲くように笑顔を浮かべた。先程の痛々しい笑い顔と違って、まぶしい

笑顔だった。

そんな彼女の笑顔に、雄一もついつい口角が上がった。

「あ、あの……」

「どうかした？」

「雄一さんは東京に住んでいて、ここにはなかなか戻って来られないですよね？」

「まあ、そうだね」

「じゃあ、その、よかつたら……」

そう言っ、綾香がおずおずと差し出したのは白いスマートフォンだった。

雄一は逡巡^{しゆんじゆん}した。いくら知り合いの子だからと言って、年頃の女の子と連絡先を交換してよいものだろうか。

しかし、雄一は断れなかった。綾香の顔を見ると、どうしても甘くなってしまう。そんな自分を自嘲しながらも、ポケットから携帯を取り出し、連絡先を教えた。

ものの数秒で、お互いの連絡先が小さな端末の中に記録された。これで綾香はいつでも雄一に電話をかける事ができる。

「ありがとうございます」

「いや、別にこれくらい構わないよ」

冷静を装ってはいたが、背筋にかいた冷や汗は尋常ではなかった。止まらない罪悪感が雄一を襲っていた。

けれども、後悔はしていなかった。綾香の助けになるのな

ら、自分の感情はどうでもよかった。

その日の夜、早速綾香からメッセージが来た。女子高生とは思えないしつかりとした文章で、今日のお礼が書かれていた。

思わず笑みが零れた。

彼女はやはり、律儀だった。

寒暖差が激しいと、身体はすぐに参ってしまう。それと同じで、感情のギャップが激しいのも、雄一の身体を蝕む要因となった。

磯泊で、ブランエールで過ごす時間が心地良かったために、東京での時間がたまらなく苦痛に感じた。東京に身体を慣らすうとしても、時折来る綾香からのメッセージが、雄一を磯泊に引き寄せた。その度に、心は安らいだ。しかし、またすぐに東京に引き戻されて、辛くなった。

彼女からのメッセージは麻薬のようだった。儂く甘いひとときははすぐにかき消される。

雄一が苦しんでいる間、会社では変化があった。

件の同僚に課長職への昇進の内示が出たのだ。

別に、雄一にとってその事はどうでもよい事だったが、そのせいで、周りが露骨に同情の視線を浴びせてくるのが問題だった。

部下が不祥事を起こしていなかったら、今頃は柳が……そんな囁きが雄一の耳に否応なく入ってきた。

煩わしいノイズだった。

誰が、課長になりたいなんて言った。

誰が、先を越されて悔しいなんて言った。

誰が、部下のせいなんて言った。

誰かが同情する度に、雄一は惨めな気持ちになった。

勝手に土俵に上げられ、勝手に試合を始められ、勝手に負けだと言われたのだ。

出世頭が一人抜きん出て出世したという、ただそれだけの事なのに、その渦中に勝手に巻き込まれるのは、ひどく不愉快だった。

どんな慰めもいらぬ。そっとしておいて欲しい。

そう願った矢先、私用の電話が鳴った。

綾香からのメッセージかと思ってそれを見たが、残念な事にその電話は彼女からではなかった。

「わざわざ呼び立てて済まないね」

「いえ……」

その日、雄一はブランエールに足を運んでいた。しかし、今日はカウンターの向こうに綾香はいなかった。その代わり、本来そこに立つべきだった人物がいた。

白髭を蓄え、柔和な笑顔を浮かべる老紳士、そう、光治さんだった。

雄一は光治さんに呼び出されていたのだ。

母親から經由して光治さんは雄一に電話をかけてきた。彼は都合のつくときでよいと言っていたが、雄一は休日になるとすぐに磯泊に戻ってきた。

「好きなものを選びなさい」

今日のブランエールはコーヒートの代わりに酒がテーブルに並べられていた。並んでいる酒瓶は名前だけ知っているような、この辺りの地酒が大半だった。十八で上京した雄一には馴染みのないものばかりだったが、唯一、父親が一枚噛んでいたみかん酒だけはよく知っていた。

光治さんに好きなものを選べと言われても、どれがどういうものか分からない雄一は困ってしまった。

「名前は知っていますが、ほとんど飲んだ事がないので」

「ほう、そうだったか」

「ええ、成人してからこっちに帰ってきたのは親父が死んでからですからね」

「そうか……じゃあ、私が選んでしまおうよ？」

そう言うのと、光治さんは雲龍紙に包まれ、一際存在感を放っていた日本酒の酒瓶を選び取った。

手渡されたおちよこに日本酒が注がれる。糖度の高い、澄

んだ色をした日本酒だった。

すすめられるがまま、それを口に含むと、ほどよく綺麗な吟醸香が広がった。口当たりは軽く、舌の上で甘く転がるが、一度喉を通ると、今まで飲んだ事のないような辛さを覚えた。たった一口で、身体が火照ってしまいそうだった。

「結構な辛口なんですね」

雄一の言葉に、光治さんは笑って頷いた。

「でも、美味しいだろう？」

「ええ、まあ」

「そのお酒は君の同級生が造っているんだ。ほら、西磯泊に酒蔵があるだろう」

「あれ、あそこって代替わりしたんですか？」

「先代が倒れちゃってね。今では彼が五代目で頑張っているよ。そういうえば東京にも最近はお出してるみたいだね」

「変わってるんですね、色々と」

「ああ、色々とな。地元の話は、今は地元だけのものじゃない」

光治さんの口ぶりは、どこか自慢げで、自分の事のように嬉しそうだった。光治さんがそう言いたくなる気持ちが雄一もなんとなく分かった。

小さな町であった出来事は、すぐに周知の事となる。喜ばしい話はみな喜び、悲しい話はみな悲しむ。古くさい田

舎町だからこそその事だった。その事に煩わしさを感じる人間もいるだろう、雄一も自身がそうであると思っているが、不思議と光治さんの語る誇りという言葉は嫌いではなかった。

「君とここで酒を飲む日が来るとは思わなかったよ」

光治さんは目を細め、しみじみとそう言った。

「だが、なんだか懐かしくてたまらないんだ」

「光治さんにとっては迷惑だったかもしれませんが、ここがみんなのたまり場でしたからね。コーヒーを飲みながら、談笑する。飲むものがお酒に変わっただけで、している事は変わっていません」

学生の時分、ブランエールは格好のたまり場だった。休日に行けば、いつも香織がいた。たまに詩織や誠がいた。客が少ないときは、大きなテーブルを陣取らせてもらって、談笑したり、勉強したり、色々な事をした。

今では遠い昔の事で、記憶のどこかに追いやってしまった。思い出した。思い出す事、ましてや浸る事はなかった。

記憶の片隅で眠りこけて、埃を被ってしまった思い出が当時の色彩を取り戻しかけている、そんな気がした。

「時が過ぎるのは早いな。私もいつの間にかあんなに大きな孫ができた」

孫、その響きに雄一はぞくりとした。光治さんは穏やかそうに笑っているが、雄一は急に落ち着かなくなっていた。

雄一は呼び出された理由を知らなかった。電話口で話したとき、光治さんは明確に理由を言う事を避けていた。言いづらい事だろう、そう考えると、思い当たる節は絞られた。

雄一は綾香との関係を言及されると思ったのだ。やましい事はしていなくとも、可愛い孫が知り合いとは言え、大人の男と連絡を取り合っていると知れば穏やかではないだろう。

「あの、要件はなんでしようか」

たまらず光治さんに訊いた。

怒鳴られる。そう思って身構えたが、話し始めた光治さんの口調は至って普通だった。

「雄一くん、君はまだ結婚していないね。いい人はいるのかね？」

「はあ、と雄一は気の抜けた返事をした。意図は理解できなかったが、とりあえず頷いておいた。」

「ふむ。その人と結婚する予定はあるかね」

「いえ、今のところは」

「ならば、いつかはしようと考えているのかい？」

「まあ、付き合いも長いですし、いつかはしようと考えてはいます」

雄一がそう答えると、光治さんは満足げに頷いた。相変わらず、光治さんが考えている事が読めなかった。

「それがどうかしましたか？」

「いや、本題に入る前に聞いておきたかった事なんだ」

「何か関係があるんですか？」

「まあ、そうだな。関係がある言えはあるし、ないとはいえない」

どっちつかずの返事に、ますます謎が深まるばかりだった。

「うむ、単刀直入に言おう。雄一くん、こっちに戻ってくる気はないか？」

予想の斜め上な事で、雄一は面食らった。

「なんですか、急に」

「実はな、君のお母さんから頼まれてな、雄一くんをなんとか説得して欲しいと」

「なるほど、そういう事でしたか」

いらぬ力が抜けた反面、他人を家庭の事情に巻き込んだ母親に腹が立った。

「私個人としても、帰ってきて欲しいと思ってる。できれば、茂の後を継いで欲しい」

「え？」

思いも寄らぬ言葉に、雄一は素っ頓狂な声をあげた。

度重なる予想外の連続に、雄一は少し焦っていた。

「農家を継げって事ですか？ でも、どうして光治さんが？」

「そうじゃないんだ。私が言ってるのは、もう一方の仕事の方だ」

「ちよっと待ってください！」

雄一は思わず大声をあげた。カウンター越しの光治さんに飛びかからんばかりに半身を乗り出して、かっと目を見開いた。

母親からの説得だという話が、どうして父親の後、しかも議員の方を継げという事に繋がるのか分からなかった。

「君が茂をどう思っているかは知っている。しかし、彼は紛れもなく礮泊のために尽くした人だ。私は彼に感謝してる。きっと、私だけではないだろう。彼がいなかったら礮泊はもつと駄目になっていた」

頭がパンクしそうだった。光治さんの言葉が何もかも通り抜けて、理解をする事ができなかった。

椅子に腰掛け直し、深く息を吐いた。そして、力の無い声で雄一は光治さんに訊ねる。

「なぜ、僕なんですか？」

「君じゃなきゃ駄目なんだ。いやらしい話だが、茂が築いた地盤は息子である君が受け継がなければ意味が無い」

「でも……」

雄一が反論しようとするのを、光治さんは遮った。

「この町に帰ってきて、君はどう思った？ 多分、記憶にあるより寂れたって思っただろう」

「ええ、まあ。こんなにシャッターが降りていたのかと驚きましたね」

「この店も閉まっていた。まあ、綾香が勉強に使っていて、扉自体は開いていたのだがね」

「いや、この店は光治さんが腰を痛めているから閉まっているんだって」

「ああ、綾香にはそう言っているが、実のところ、そうじゃないんだ。腰を痛めているのは事実なんだが、もっと根本的に、客が入らなくなったから閉めたんだ。道楽みたいな店だったが、客がいなければ意味が無い」

「そう、だったんですか……」

「何と言うか。茂はな、そんな町をなんとかしようと思っていたんだ。だが、夢半ばで亡くなってしまった」

光治さんの話を聞きながら、雄一はいっただったか綾香が言っていた話を思い出していた。確かに、父親はなんとかしようとして働かかっていた。それは紛れもない事実であるのだが、それがどうしてこんな話になるのだろう。雄一はどうにも飲み込めなかった。

「私たちはこの磯泊町ですっと生活してきた。愛着だってある。そんな町がそのまま緩やかに死んでいくのは忍びないんだ。だが、情けない話、私はそれを止める事はできない。私には茂のように議員になるような力がないんだ」

「どうして、僕なんですか……僕じゃ務まりませんよ」

雄一は力なく項垂れた。

「君は誰よりもこの町の事を考えていたじゃないか。高校生の頃、よくこの町の話をしていたのを私は覚えている」

「それは、ただ父親への反抗で……」

「茂への反抗のためだけに、この町の事を調べてたっていうのかね？ 何も調べずして、男子高校生があんなに事細かに町の情勢を語れるわけがない。それに、父親に反抗するだけなら、もっと他に方法があつたはずだ」

雄一は何も言い返せなくなった。何を言っても、光治さんはそれをほねのけた。

心がざわついていた。憔悴、怒り、悲しみ、様々な感情が胸の中で喚く。

喉がヒリヒリして、冷や汗が止まらなかった。

「すまない。一方的に言い過ぎたね」

光治さんは頭を下げて雄一に謝った。

「無茶な事だと、分かっている。でも、少しでもいいから考えて欲しい」

思考がいつしか止まっていた。

光治さんがそれ以上何を言っても、それを言葉として理解する事もできなくなっていた。

光治さんが水の入ったグラスを雄一に手渡した。雄一はそれを受け取ると、一気に飲み干した。

ほんの少しだけ意識がクリアになったが、それでもまだ、

全てを理解する事はできなかった。

「雄一くん、君は知らないだろうけどな。茂はお前の事をよく褒めてたんだ。自慢の息子だって」

「まさか……あの、父親が？」

「一期目の町長を終えるときも、いつかは息子にと言っていたんだ。君に、期待していたんだよ」

馬鹿馬鹿しい、そう言おうとしたが、途中で詰まって言葉にはならなかった。雄一は、一つ気にかかっていた事を思い出していた。

父の書齋に置いてあった政治に関する書籍。父親には易しすぎると疑問に思っていた。もし、光治さんの言葉が正しいのなら、あれはつまり雄一のためのものだった。

「不器用な人なんだよ、君と同じで」

「父親と、同じ……」

自分自身に問いかけるように、何度もその言葉を繰り返した。

「ああ、よく似ているよ。若い頃の茂とそっくりだ」

雄一には、よく分からなかった。

一緒にしないでくれと否定の言葉を出そうにも、それが口から出る事はなかった。ただ、漠然とした不安——雄一が経験する限りそう形容するしかない感情が塞き止めていた。

「君が今感じている感情の揺らぎは、決して悪いものじゃない

まあ、そうさせた私が言えた事ではないだろうがね」

ブランエールを出る頃には時刻はすでに十二時を回り、辺りは真つ暗闇になっていた。

酔いはすっかり覚めてしまっていた。いつも綾香を送っていく曲がり角まで一緒に歩いたが、その足取りははっきりしたものだ。

別れ際、光治さんが最後に一つだけ、と言い出した。

なんとなく、予想ができていた。

光治さんの目が、すでに物語っていたのだ。

ほんの少し言い淀み、一呼吸置いてから、光治さんは雄一に「香織の夢を叶えてあげて欲しい」と言った。

6

年が明けた。

磯泊町では数年振りに雪が降った。細かく、積もるような雪ではなかったが、子どもたちはその煌めきに吐息を漏らした。

久しぶりに過ごした実家での正月は昔のように親と新年早々喧嘩するなんて事はなかったが、どこか気まずい時間だっ

た。父親が死んだからという事だけではないだろう。

ずっと、光治さんから言われた事を考えていた。

しかし、いくら考えても答えは出ない。視界が霧で覆われていて、どう進めば良いのか全く分からなくなっていた。

また一つ、重りを勝手にぶら下げられたような気分だった。

人からの勝手な押しつけは好きじゃない。しかも、弱点を突くようなやり方はなおさら好きじゃなかった。

香織のためとは言っても、結局は自分のため何じゃないか
と
思って、モヤモヤとした気分になった。

胸の中を、黒血くろちのようにどろっとしたものが巡っている。
たまらなく不快だ。

どこにいても、どうやっても、その不快感は拭えなかった。

「難しい顔をしていますね。どうかしましたか？」

だから、こうしてブランエールにいても雄一は浮かない顔
をしてしまった。しまったと思って、雄一は平静な顔を装よそおった。

「いや、大丈夫。なんでもないよ」

「本当にですか？ 眉間みけんがぎゅっと寄ってなんだか悩んでい
るって顔をしています。何かあるんでしょう？」

「……そうだな。なんて言うか、早めに終わらせたかった宿
題がまだ終わっていない、そんな感じだ」

悩みは雪のように溶けてはくれない。次々と降ってきては

堆積たいせきし、重りになっていく。捨てられればいいのだろうが、
周りがそれを阻害する。

「その宿題はやるべきかやらざるべきか、迷っているんです
ね？」

「まあ、そうだな。でも、宿題がある事には変わりない。や
らなければ、先生は失望するだろうな」

失望。口にして、何とはた迷惑な言葉なのだろうと思った。
勝手に期待を寄せて、勝手に裏切られた気分になる。凶々し
い事この上ない。

「雄一さんは律儀ですね」

「律儀というのは少し違う気がする。何と言うか、臆病おくびよう
なだけだよ」

億劫おっくうという言葉で片付けてしまいがちだが、結局のところ
臆病だから、答えを出すのが怖いだけなのかもしれない。ま
かり間違っても、綾香の言うような、律儀というわけではな
い。律儀ならなおのこと、答えを出さなくてはいけない。

「私たちが、似たもの同士じゃないですか？ ここにいな
い誰かに重ねられている」

「え？」

「雄一さんは茂さんに重ねられている。違いますか？」

綾香は全てを見透かしている、そう言わんばかりの視線を
雄一に向けた。蛇へびに睨にらまれる、まさにそのような心地で身体

が固まり、背筋を一筋の汗が流れた。

「茂さんが亡くなってから、何度、茂さんによく似ているって言われましたか？ 将来的には、なんて話を何度されましたか？」

「……覚えていないよ」

「でも、言われたんですよね。少なくとも、おじいちゃんは言ったでしょうし」

心臓が強く跳ねた。どくどくと、鼓動を打つ早さが増していく。

綾香に視線をやると、彼女は複雑な表情で雄一を見つめていた。彼女の感情が読めなかった。

「実は、おじいちゃんから聞いているんです。雄一さん呼び出したときの事を」

「そうだったのか……」

なんだか、情けない気持ちになった。雄一の悩みがいかにちっぽけなものか、綾香は知っていて、声をかけてくれたのだ。力が入って固まっていた身体が急激に弛緩する。

ひどく、情けなかった。

「でも、全てを知っているわけではないんです。もしよかったら話してみてはくれませんか？」

「いや、楽しい話じゃないし。そんな大した事じゃない」

「楽しい話じゃなくていいんですよ。雄一さんの悩みを聞きたいんです」

「いや、しかし……」

雄一は躊躇した。年下の少女に人生相談できるほど、雄一のプライドはすり減っていた。

躊躇う雄一に綾香はふう、と息を吐いた。そうして、背筋を正したかと思うと、雄一の腕を掴んで、自身の胸元にぐっ

と寄せた。突然の事に慌てて振り払おうとしても、彼女は強く握ったまま離さない。そうしてそのまま、彼女は自分の胸に雄一の手を触れさせた。

「私の拍動は今、ここに生きている証です。誰が何と言おうとも私は私。香織じゃなくて綾香なんです。雄一さんも、そうですね？」

あなたもあなたは茂さんじゃない」
服の上からでも感じられる、強い鼓動。雄一の鼓動の比ではないほどに、強く早い。

離そうとしても、離れなかった。綾香のどこにこんな力が眠っていたのか分からないくらい強い力で、彼女は引っ張っていた。

「面影、と言うより期待なんですか。誰かが担っていた事を、また別の誰かに期待する。代替品のように。それって、むかつきますよね」

綾香は笑った。頬を朱く染めながら。

離された右腕が、だらしなく揺れ落ちた。
思考にラグが生じていた。彼女に何か言わなくては、そう

思っても答えるべき言葉が出てこない。

色んなものをごちゃ混ぜにして、コーヒーと共に流し込んだ。そうして漸く、言葉が出てきた。

「他に、方法があるだろう」

「こういうのはインパクトがいるんですよ。脳が揺れるくらい」

「揺らし過ぎだ。おかげで、思考が上手くまとまらない」

「いいんですよ、まとめなくなっちゃって……。お話ししてくれませよね」

雄一は視線を宙に彷徨^{さまよ}わせながら、苦笑いを浮かべた。

一方で、綾香は真っ直ぐ雄一を見つめていた。彼女の瞳は、煩雑に混じり合った色ではなく、ただ一色を宿しているだけだった。

そこまでされて、それでもなお突っぱねようとするほど、雄一は捻^{ひね}くれてはいなかった。

強い眼差^{まなざ}しでこちらを見る綾香に、雄一は今抱えている悩みを全て吐露^{とろ}した。包み隠さず、全てを。

まとまりもなく、時系列すら定まっていなような話だった。いい歳の大人とは思えないちぐはぐなものだった。

けれど、綾香は何も言わず、最後まで辛抱強く聞いてくれた。

誰かにこんなに真剣に話をしたのはいつ振りだろう。そう

考えると、一人の少女の顔がちらついた。

全てを話し終えると、綾香は二杯目のコーヒーを注いでくれた。喉を潤^{うるお}わせるに適したものではないが、それでも乾きはマシになった。

暫しの沈黙の後、綾香はぼつぼつと話し始めた。

「正直に言うと、私は雄一さんからことなく茂さんの面影を感じていました。もっと言うと、今はいい父親の気配を感じていました。お父さんがいたら、こんな感じなのかなあって。おかしいですよ。自分は叔母を重ねられると怒るくせに」

そう言って、綾香は乾いた声で笑った。自嘲している、そんな声だった。

「連絡先まで聞いて、相談に乗ってもらって。そうしているうちに、あれ、これってお父さんとは違うんじゃないかなって思ったんです」

視線を向けたり離したり。綾香は忙しく目を動かした。

「雄一さんも、私の事を叔母さんと重ねていましたよね。あるときから急に、私を私として見てくれようとしているみたいでしたけど。初めてです、そんな人」

そういえば、そんな事もあった。彼女がかわいそうに思えて、見ないように努めた。今になって考えると、それもまたエゴに満ちた残酷な事なのかもしれない。

「甘えられる年上の男性って、甘美な響きですよ。思わず、恋に落ちてしまいそうな、素敵な言葉。だからですかね、あの種の自己矛盾に陥ったんです。重ねられたくないのに、重ねられてもいいって。考えて考えて考えたんです」

重ねられてもいい、その言葉がざらついて聞こえた。
綾香はゆっくり、深呼吸した。

「急になんだかどうでも良くなりました。結局、どうしたって私は私ですから、その人にはなれません。負い目なんて考えるのは止めた。その人なんかどうでもいいって。だから、雄一さんも誰かの期待なんて無視してしまえばいい。自分を押しつけてほしい、私みたいに露骨なアピールだって……迷惑でした？」

「いや、別に……」

「だから、雄一さんも自分の思うようにしたらいいと思います。それが、結果として自分のためになるか、誰かのためになるかは関係ないです」

綾香は小さく微笑んだ。日だまりのような暖かさがそこにあった。

「私は自分のやりたい事をやる事にしました」

そう言うと、綾香は一枚の紙を鞆かばんから取り出して、雄一に差し出した。

模試の結果が書かれた紙だった。全てがA評価である事よ

りも、第一志望に書かれた大学が、雄一が卒業した東京の大学であるのに目がいった。

「今までは母に気をつかって名古屋の大学を書いてましたけど、今回からはこの大学にしました。これからは母とぶつかるかもしれません」

「そっか」

「辛いときは辛いと言える人間になるべきって、雄一さんが前に言ってくれましたが、その言葉はきくと、雄一さんが誰かから言われた言葉なんですよね」

「ああ、前に恋人からね」

「本当はこれから先、私が叔母の代わりに雄一さんを支えないんですけど、それは難しそうなのでその人にお任せします。きくと、その人もよくしてくれますから。あ、でも時々いいので私の事も頼ってくださいね」

彼女は悪戯いたづらっぽく笑った。

少しばかり、思考が止まっていた。でも、もう少しでもやが晴れる。そんな気がしてならなかった。

「やりたくない事は全部やめてしましましょう」

それができたら苦労しない。そう思ったが、今まで頭を悩ませてきたのだから、そろそろできたっていい頃なのかもしれない。

最後の一口を飲み終えると、漠然ぼくぜんとそんな気がした。

「先輩の考えが分かりません」

休憩中、後輩がわざわざ喫煙室までやって来てそんな事を

言った。

後輩は煙草を嗜まない、むしろ嫌煙家であった。

「ここまできて、辞めてしまうなんでもつたいないです。先輩はまだまだやれますよ」

後輩はひどく感情的に、雄一をまくし立てた。

「それは買いかぶりだよ。所詮はその程度だったと言う事だ」

「確かに、少し前の柳さんは元気がなかったみたいですけど、今は目の色が違います。今の先輩なら……」

「別に、君にとって悪い話ではないだろう？ 今まで被せられていた蓋が取れたんだから」

「しかし！」

「君が、僕の代わりにレールに乗ればよい。君は優秀だ、それくらい容易いだろう」

「僕には、理解できません！」

後輩は顔を真っ赤にして、喫煙所を去って行った。

彼は雄一と同じ大学の出で、後輩たちの中では一番の出世頭だった。昨年の夏から秋にかけての大きな仕事に彼も携わって

おり、よく知る男だった。

彼もまた、雄一を追いかけていた一人だった。

だからこそ、彼は雄一にこんな事を言ったのだ。

雄一には彼の気持ちは理解し難いものであったが、彼の行動には納得できた。

今の雄一は、比較的に物事を鷹揚に受け止める事ができた。

一月の終わり、雄一は仕事を辞めた。

引き継ぎなどの期間を入れると、正式に辞めたのはもう少し後になるが、気分的にはもう、上司に退職届を出したところで切れていた。

勿論、引き留められた。先程の後輩のように周りから、特に夏の仕事を共にした人たちからは強く止められた。

でも、雄一の気持ちは変わらなかった。

やりたくない事を全部やめよう、そう決めていたのだ。

退職届に捺印するときも、想像以上にあっさりとする事ができた。もう少し悩むかと思っただが、実際はそんな事はなかった。

思いつく限り、やりたくない事を潰していった。全て、あっけないほどに。

そうして、余った時間で、様々な事をした。

毎日、好きなときに寝て起きた。

時折早起きして、太陽の日差しを浴びながら散歩した。近所のカフェに通って、マスターと仲良くなった。

自炊の頻度が増え、料理のレパートリーが増えた。たくさんの本を読み、映画を観た。

身体がすっかり軽くなっていた。身体中の毒素が全て抜けたような心地で、やりたい事を探すには絶好のコンディションだった。

二月の下旬から、新たな道探しを始めた。

しかし、こちらはやりたくない事をやめるのと違って、なかなかスムーズにはいかなかった。

でも、雄一は焦らなかつた。半分、答えが出ているようなもので、その答えに合うような解法を探しているだけなのだ。

解法は間違っていない、たどり着ければよい。

それ故に、雄一は穏やかな気持ちで途中式を書いていた。

途中式が完成したのは、三月に入ったばかりのある日だった。

景色がころころと変わった。山であったり、海であったり、学校であったり。どの景色にも友人と騒いでいる幼少期の雄一がいた。

その光景を大人になった自分が見つめていた。スーツを着込んでくたびれた自分を指さして、幼少期の雄一は笑った。

目覚めたとき、目元に涙の跡があるのに気がついて、思わず笑ってしまった。

朝から元気が満ちていた。いや、むしろ興奮していたと言ってもよかつたかもしれない。感情が高ぶり、落ち着いていられなかつた。

誰かに言いたいと思った。

そう思い立つと、携帯電話に手を伸ばし、かけ慣れた電話番号に電話をかけた。

日曜日だったのが幸いして、麻衣子はすぐに出てくれた。

寝起きの間延びした声で、何の用事か訊ねた。

「今日、会わないか？」

電話の向こうでは、ぶつぶつと何かを言っていたが、彼女は結局、分かつた、と了承してくれた。

色々と準備が必要だった。

今までならば、その準備も億劫に感じたかもしれないが、今はなんだか楽しくて仕方がなかつた。

昼過ぎ、麻衣子はやって来た。

家主であるはずの雄一を椅子に座らせて、自身もその対面に座ると、雄一の顔をじつと見つめ、

「決まったの？」

と訊ねた。

雄一は静かに頷いた。

すると、彼女は顔をほころばせて、喜んだ。

「実家に帰る事にしたんだ」

はつきりと、そう言った。

「そう……やっぱり、その選択になったかあ」

「ダメかな？」

「いいと思うよ。私はその選択肢が最良だと思ってた。でも、雄一は変なところで頑固だから、こっちで新しい仕事を見つかるんじゃないかと思ってた」

「最初は確かに考えてたよ」

「最初は、ね」

麻衣子は言葉を繰り返した。

「色々言いたい事はあるけど、まあ、いいわ。全部飲み込んであげる」

「言いたい事があるなら言ってくればいいのに」

「いいわ。みつともないし。せつかくの日に水を差すのは無粋だわ」

よく分からず、雄一は首を傾げる。それを見て、麻衣子はため息を吐いた。恨めしげな視線を向けるので、雄一はたじろいだ。

「そうね。あなたは不器用なもの、そんな事ができる人間じゃないわよね」

「なんなんだ、一体……」

「まあ、いいじゃない。そうだ、せつかくの日曜日なんだし、

どこかに出かけましょうよ。ね、決まりよ」

麻衣子はそう言うと、今度は強引に雄一を立たせて、玄関まで押しやった。ろくすっぽ靴も履けていないのに、ドアから押し出される。思わず、苦笑しながらも、気分は良かった。

穏やかな気候だった。冬が終わりを告げる、そんな日和だった。

8

「これで、お別れですね」

感慨深そうに、綾香が呟いた。

窓辺の席に座り、外の景色を見つめる彼女の横顔は、どうか大人びて見えた。

「おかげさまで、東京の大学に行けます。ありがとうございます。しました」

「僕は、何もしちゃいないさ」

「一緒にお母さんを説得してくれましたし、勉強も教えてくれたじゃないですか。ずっと、ここで」

故郷に帰ってきてから、一年が経っていた。その間、仕事の合間を縫って、ブランメールで彼女の勉強を見つけていた。

「どうしましょうか、行く前からホームシックになりそうです」
「寂しくなったら、帰ってくればいいさ」

「そんな簡単に帰れないですよ。交通費も馬鹿にならないですし」

「僕が迎えに行くよ。いつだって、君のためなら」

「あんまりキザな事を言うとか、麻衣子さんに言いつけますからね」

「それは困るよ」

綾香が笑う。つられて雄一も笑った。

「そろそろ行きますね」

「もう、そんな時間か。じゃあ、出ようか」

「はい」

ブランエールを出ると、春の穏やかな暖かさに包まれた。

綾香はブランエールの鍵を閉めると、こちらを向いてにっこりと微笑んだ。

彼女に言いたい事、伝えたい事はいくらかでも沸いてきた。でも、それらを全部噛みしめて、無理矢理飲み下した。

——僕は、十八歳の香織を知らない。

今、雄一の目の前に立つのは、十八歳の綾香だった。これから先、彼女が歩むだろう人生は、雄一には想像ができなかった。だから、年長者ぶって彼女に講釈こうしゃくを垂れたところで、それは何の役にも立たないだろう。

彼女の人生は彼女のものである。

「それじゃあ、頑張っておいで」

雄一は彼女にただエールを送るだけにした。

綾香は力強く、はい、と答えた。

そうして、彼女は旅立って行った、未来に向かって。

彼女のようにはなれなかったが、それでも満足している。今はやりたい事をやる活力があった。

「結局、こうなったか」

ブランエールの隣に立つ、町の掲示板に貼られた選挙ポスターを見ながら、雄一はそう呟いた。

散々、反発していた父親と同じ道を辿るのは今でもほんの少しばかり抵抗があった。でも、それでもいいと思えた。

思い出の場所を残すため、その理由がある限り、何とでもなると思えた。

それに、将来、この町を自分の子どもが好きだと感じられるような町にしたい。そんな願いもいつの間にか増えていた。

途中式は散々悩んで見つけたくせに、一度見つかると次々と増えていった。

今日もやる事がたくさんある。ここで立ち止まっているわけにはいかなかった。

ブランエールを離れ、歩き出した。
不意に風が吹いた。

その風からは、春の匂いがした。

空を見上げてみると、うつすらと雲がかかっていた。

養花天、春を告げる空だった。

もうすぐ、桜も咲く頃だろうか――